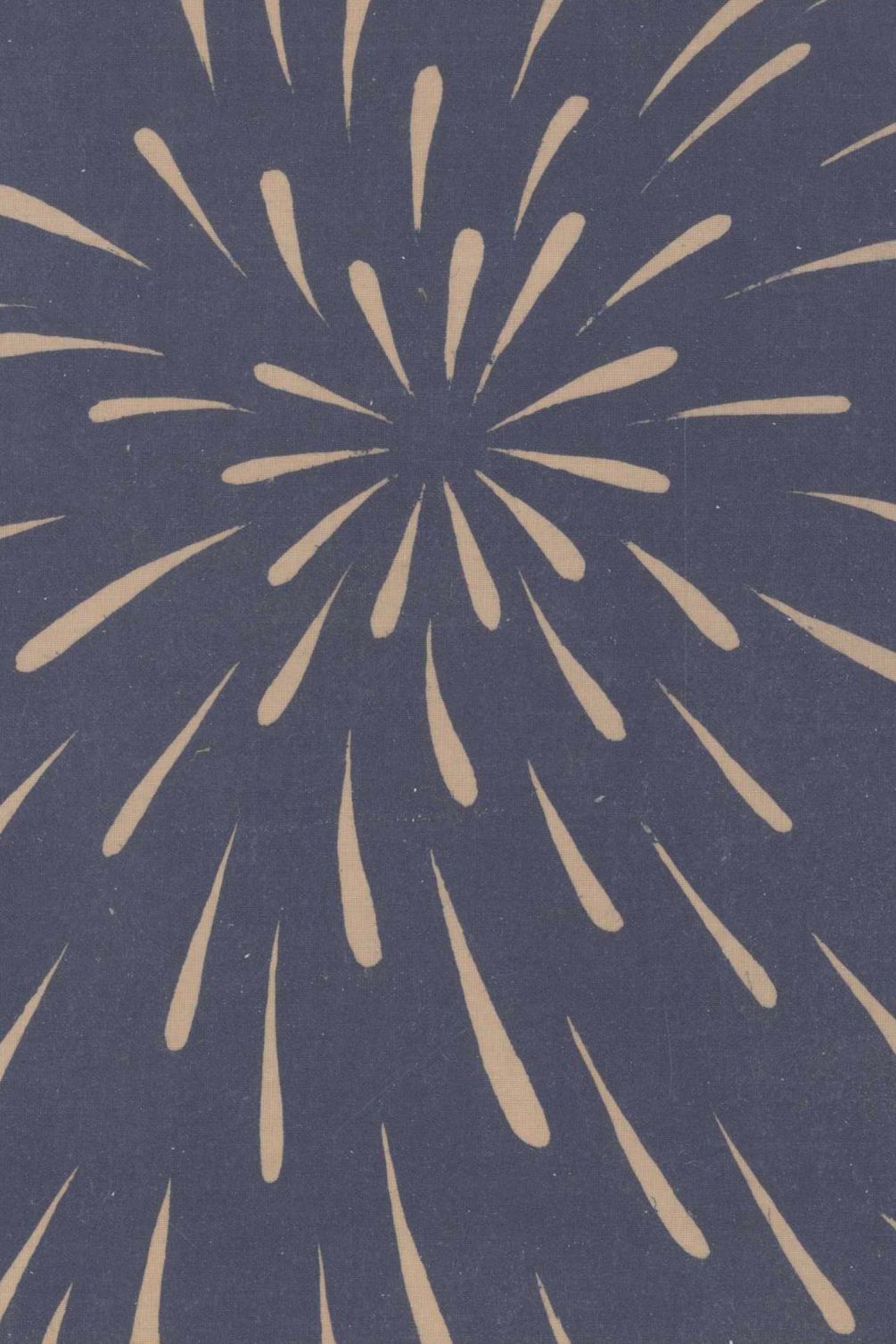

後編

橋まで

水上 勉

新潮社版

その橋まで　後編　九〇〇円

昭和四十九年十一月十五日印刷
昭和四十九年十一月二十日発行

著者　水上勉
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町　七一
電話
業務部　(03)二六六一五二一一
編集部　(03)二六六一五四一一
振替　東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・大口製本株式会社
© 1974 Tsutomu Minakami Printed in Japan

その橋まで

後編

後編目次

その橋をおぼえているか　5
二　又　路　24
三つの疑惑　43
父　帰　る　87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間の更生 131
根尾の小橋 172
もう一つの橋 206
生きるということ 244

裝

幀

朝

倉

摂

その橋をおぼえているか

1

帰りしなに、名本は、丸窓から休憩料を支払った。このとき、顔をのぞかせた女は、三十三、四だった。いかにも、このあたりの農家出らしい醜女で、清光園の女中のように、客馴れしていない。秋までは田圃で働いていた陽焼け顔を、無愛想にみせて、名本が三千円渡すと、もう盆の上に五百円のつり銭を用意していて、だまってずらせた。顔と胸だけみえた。背丈もわからぬ。したがって、女の方からは、室内の二人は完璧にはみえないはずで、うしろに、かくれるようにしていたもと枝は誰にも覚えられてない。名本はやがて、鍵をあけたままにしておいたコロナ六〇年型のドアをあけ、もと枝を助手席にのせ、自分は反対側に廻って、運転席にすわった。すると、女中が向うでボタンを押した。蛇腹の押しあげ戸が、キリキリと音をたててあがる。外は雪だ。一時間前に、入った時、轍のあとが幾本もあったのに、降りつもった雪はそれを消してしまっている。エンジンを勢いよくふかして、アクセルを踏むと、車は心もちスリップしながら、表へ出たが、ここでだって誰にも気づかれていない。

〈やっぱり、完全犯罪は可能だな……〉

名本は心の中で思う。もと枝には打明けていないけれど、この日の宿題は、モーテル「夢路」の内情をとくとみて、男が女をつれこんで、部屋で殺した場合、死体を車のトランクにのせて、そのまま、モーテルを出られるかどうか、にあった。可能だ。名本は、いま、谷汲の娘が、市中の繁華街へ出て、車にのった若者に誘われて、ふと気がゆるんで車に乗る。恐ろしいモーテルとは知らず、つれこまれたあと、泣けど叫べど、女中は助けにきてくれず、抵抗のあげく、男に絞め殺される不幸な断末魔を想像して眼が冴えた。こと切れた娘を、男は縊死体とみせるべく、用意した縄で首をくくって、車のトランクに入れ、どこか近くの、自殺に入りこめそうな山へ、車を走らせるのである。泣き叫んでも不思議に思われない密室——。その密室で、女を絞めころすのは自由である。トランクへ入れても、女中は知らん顔だ。丸窓から、ちょっと手をだして精算するだけで、女中は、無愛想にボタンを押して車を出してくれるのだから——。

「奥さん」名本は助手席のもと枝が、まだ、はれぼったい瞼を染めて、名本がベッドをはなれるまで、しがみついていた名残りを、いつまでも温めているかのように、うっとりしている横顔へいった。

「ぼくはこれから、崇福寺さんへ、旅行許可をもらいにゆかなりません。ですから、奥さんを、駅へ送ります」

「ほんなら、うちを丸栄の前でおろしてくれんかなも」もと枝は、もういくらか、女主人のひびきをおもわせる口調で、「気をつけていってきて。うちの人も心配しなるで」

この雪をついて、名本が富山へゆくというのに、作太郎も、もと枝も気がかりだった。しかし、名本は、いくら雪でも、チェンさえまいてゆけば、日本のいかなる山間地の道も、国道ならば除雪もゆきとどいているから平気だといった。また、名本が汽車でなくて、車でゆくことは、富山の村の人らを安心させる好材料にもなるだろう。いわれれば、上島夫妻も、うなずかざるを得ない。も

と枝は、その上、はじめて外で浮気してみたい欲があったから、レンタカーを借りにゆく名本についてもこれた。しかし、いざ、いま別れるとなると、雪の激しく降るのが気にかかる。
「事故をおこしたら大変だからね」もと枝はいった。「あんたは、ふつうの軀じゃないんやから」
「よくわかっています、奥さん。安心してください」
名本は、少し他人行儀にいった。いまし方、裸で抱きあっていた女が、同じ助手席につつましく乗っている。このような経験も、名本にははじめてのものである……モーテルという宿がなければ味わえない「あそび」だ。
磯原がいつか、名本が垂井から光昌へくる途中で、娘のヒッチハイクに出喰わし、嫌々ながら乗せてきたといったら、〈そんな女は、モーテルへつれてゆけば、一発や〉といった。名本は、まさか、と思ったものだが、しかし、いま、自分が、もと枝とすごしてきた「夢路」の時間を思うと、磯原のいったことも本当だと思う。
名本は、丸栄百貨店の前で、もと枝を降ろして、もと枝が、雪の中で手をふるのに別れて、岐阜へ向った。孤独になると、ふたたび、車を利用することで果せる男女の新しい「あそび」に、胸がはずんだ。週刊誌をよめば、「カーセックス」という字がとびこむ。国道をとばせば、「ご同伴歓迎」のモーテルのネオンがそこらじゅうに明滅している。この世は、車とセックスの時代だ。
雪の中を、車をはしらせながら、名本は、いま、モーテルというものは、解放された性を、満足したいために、蛾のような女が、男を誘いこむ巣だ、とふと思う。男が誘いこむのではない。男が、町を歩いていて、車を走らせていて、女に挑発されれば、その気になってしまう。やはり女の方に、最初の誘いがありはしないか、とふと思う。
十七年前にはなかったモーテルの出現を、十七年前に見ることのできなかったミニの女と結びつけて、性解放だといわれる今日がわかる気がする。

〈馬鹿だなア……モーテルだって、健康な夫婦の泊る時もあるぜ〉
磯原はいったっけ。
〈なにも、不良少女を、中年男がつれて入るところとばかり決めるのは早いよ。あれが出来たおかげで、健康なカップルもいくつか出来たやないか〉
磯原はそういって、自分には、とうていゆけない場所だ、と運転できないことを自嘲しているが、健康な夫婦も、あのモーテルでは、不健康な性をあそぶ一瞬があるのではなかろうか。
名本は、崇福寺の門前にくると、車をとめて表へ出た。雪は小降りだった。空を仰向くと、雲が割れて、西の方に明るみが出ている。伊吹は晴れたのか。それなら、天気は落着くとみてよい。ほっとしながら、層門をくぐって、愚堂と松山警部補が、朝出がけにつけた足跡が、まだ、うっすらと凹みをみせてのこっている石畳を歩いて玄関にきて、戸をあけた。ごめん下さい、といった。法子だった。
「あら」法子もウールのグレイのミニスカートをはいている。
「父から、電話がありましたわ。あなたがいらしたら待っててもらってて、云いなあって……」
名本は不思議に思う。
「和尚さんは、ぼくがくるのをご存じだったんですか」
「知ってました。……駅からありましたのよ」
「駅から?」名本は、どういうことかと思った。不安が走る。
「名本さんは、垂井で、父と会われなかったですか」
「いいえ、和尚さんは、垂井へゆかれたですか」
「そうよ。けさ、十一時ごろだったかしら……福井から、お客さまがいらしてね? ……出かけたの。名本さんと、すれちがったんですかなも」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「……」

名本は絶句した。福井から客があった。愚堂和尚は、その客がきて急に垂井ゆきにきめた。

「福井のお客さんとですか」

「いいえ、ひとりよ……松山さんです。名本さんは、知りならんですわ。福井の方で……あたしも初対面でしたけど……父は、その方が帰りなあってからゆきました」

名本は、法子のきょとんとした顔を見すえた。福井の松山——。石出誠のところへ、再三手紙をよこしたり、電話してきたりして、真柄きよ子の死に疑問をもっている男。福井県警警部補。

その松山が何しに岐阜へきたのか。

2

粗末な岐阜保護観察所の建物は前述したとおりである。いま、この塗料のはげた横板貼りの仮洋館の軒には氷柱がつらなって、軒下には煤けた雪がつもっている。例の応接間に、笹本愚堂と鯵村がならび、その前に松山貞三が背をまるめてすわっている。

松山貞三が書類をひきよせると、声をあげて読む。

誓約書

昭和四十三年（保）第一七二〇号

誓約事項

一、一般遵守事項

1　一定の住居に居住し、正業に従事すること

2　善行を保持すること

3　犯罪性のある者又は素行不良の者と交際しないこと

4　住居を転じ、又は長期の旅行をするときは、あらかじめ保護観察を行う者の許可を求めること

二、特別遵守事項

1　料飲街に出入りし飲酒は絶対になさぬこと

2　日常生活を清潔にし短気をおこし、濫りに他人と喧嘩しないこと

3　被害者の冥福を祈り朝夕祈禱を欠かさざること

4　職業をみだりに転々せざること

5　施設で世話になりたる岐阜刑務所保安課長上林次郎、身許引受人太地喜三郎の二氏に、日常を報告、更生の実をあげること

私はこの度岐阜刑務所、中部更生保護委員会岐阜支部の保護処分により、岐阜保護観察所の保護観察を受けることになりました。今後は、私の保護観察を担当して下さる保護司笹本愚堂殿の御指導を仰いで只今お示しのありました遵守事項をよく守り、修養につとめ、立派な社会人に更生する決心であることを、ここに固くお誓い致します。

昭和四十三年八月十日

本人氏名　名本　登㊞

「第四項目のですね……長期の旅行をするというところですよ。そこは、改正になって……去年までは三日以上でしたが、ことしから一週間ということになってます」

「去年というと、十二月にはしかし、名本は、もう、垂井に移ってたでしょう」と松山がいう。

「はあ」

「……この太地木工さんは、身許引受人でもあるわけですね……それを、どうして、出所早々に名本はかわったんですか」

松山は眼鏡の奥の眼を烱らす。

「事情があって、われわれが許可しました。本人が勝手にやったわけではなくて、太地さんも……事情を許しております」

「それはですね」と愚堂がよこから助太刀をだした。「松山さんから岐阜県へ出された書類がですね、原因しとるんです……あんたたちには、あの書類が何でもないことのようであっても、当人の名本には、じつは、大きな影響をあたえた……折角の職場をフイにしましたよ」

「わたしらの書類といいますと」

「長良川の一件です、あんたは、名本をあの時、犯人扱いなさったでしょう」愚堂の語気が荒くなった。「あれで……大きに迷惑してなも、名本はあの工場に居たたまれなくて……つまり、折角の更生の門出を……台なしにしてしもうた」

「……しかし、それは」と松山は愚堂をにらんだ。「おかしな話ですな。あの男は、就業中に女とつれ込み宿へ出かけたんですよ。しかも、その女が、夜……その宿で不審な死に方をしてるんですよ。みなさんは、どうも、私を、誤解してなさるようだ。わたしに何か先入観があってきたようにとられては、心外ですな」

松山貞三は口もとのうすい皮膚をうごかした。

3

「ま、そう云われれば、たしかに……」と鰺村は口ごもって、「監督のゆきとどかなかった点を、認めざるを得ません」

愚堂は急に気のよわくなった鰺村の方をにらんだ。
「鰺村さんは、よく、石出さんにあわれるそうですね」と松山がいった。
「用事のある時くらいですが」と鰺村が松山をみた。すると、
「石出さんが、わたしに云いました。犯罪者にとって警察は入口だが、保護観察所は出口だ。しかし、いまの観察所は、どうも出口だけとはいえぬ。もう一つの犯罪の入口じゃないか。これは何も、岐阜のあなたに云ってるわけではないんですよ。福井の場合をいってるんです。再犯の続出が、こうも多い。つい、警察も、そんな口をききたくなりますね。じっさい、けさも、笹本さんに云ったんです、福井の場合、婦女暴行、強姦未遂の半数は、前科のある者です」
「といって、それで、日本中に起きている婦女暴行事件を、虱つぶしに検挙して、これを刑務所へ入れるとすると、一日で満員になりますがなも」と愚堂はいった。
「一時的の、局部的な事実で全体をはかってもらっては困ります。われわれとしては、再犯防止は、たしかに、第一目的ですし、更生保護のむずかしさも、かかって、ここにあることはいうまでもありません。名本君の場合、更生ぶりもみごとですし、笹本さんの懇切な指導で、まったく見ちがえるような真人間に復活しています。それは、ぼくが確信をもっていえます」
鰺村は熱のこもった云い方をした。それで愚堂もつい、つりこまれ、
「わしも、あれの更生は太鼓判を捺しますな」といった。
太鼓判ときいて、松山は、いかにも、愚堂を軽蔑した眼でチラとみた。
「和尚さんも、ながいあいだ保護司さんをしてこられて、ご苦労と思いますが……しかし、これは決して、和尚さんの手落ちを云々する意味でなく、越前籠ヶ瀬で起きた女の不審死事件に、名本登が関係していなかったかどうか、その事実をわたしは調べたいのでしてね」と皮肉たっぷりにいった。

「それは、もうさっきもいったように……」と愚堂はいう。「上島作太郎さんの証言ではっきりしています。名本は、二月四日は垂井にいました。大垣の光昌木工へ納品する時期は、地方出張はさせない……と上島さんがはっきり云いましたから」

愚堂は、松山がこっちのいうことを、信じないのが不満だ。

「わたしは、今日、垂井までいって、調べてきたんです。信じてほしいと思います」

松山は、眼の奥をキラリと光らして、「それでは、名本君が、岐阜ナンバーのライトバンを乗りまわしていることをお認めになりますか」ときいた。

「そんな車のことは、くわしくはしらんが、垂井は、大垣ナンバーかなも、岐阜ナンバーかなも」愚堂は鰺村にきく。

「ぼくも、そういわれると……どうも。しかし、大垣ナンバーというのはないのじゃないかな。垂井も岐阜ナンバーとちがいますかなも」と鰺村はいう。そのふたりの応酬を松山はまた冷笑して眺めていたが、

「雇傭主が、いくらその日は家にいた、大垣の光昌さんのところへ行っていたといってもですね。岐阜ナンバーの車を当日乗りまわしていた事実があれば、わたしとしては問題にしなければならないわけです。ご存じのように車は、時速百キロなら、二百キロの遠出は二時間でできますからね」

二百キロというところに、松山は力を入れる。

「名本登が、大垣から福井の籠ヶ瀬まで車をすっ飛ばしたとすると、二時間と少しで来れることは可能なんです。雇傭主さんには、大垣で少し手間どったといえばすむことですしね。思いたくないことなんですが、正直、わたしの疑いは消えないんです。それは、やっぱり長良川の事件にひっかかるからなんです」松山はここらあたりから、雪をついてきた目的が、これだといわぬげに熱をこめた。「あの事件で、名本は、遠からず、死因に関与していると断言してよい。かりに、真柄きよ

子の死が自殺だとしても、何らかの関係があると思いませんか。ひる一時頃に二人は寝たんですからな。しかも、真柄きよ子は、五年間の文通をしている。刑務所時代の名本は、幼な馴染みのきよ子に、多少以上のなつかしみや、親愛感をもっていたことは当然です。だからこそ、当人も、年に一どの休日を利用して、名本に会いにきた、名本もまた、金華山を散歩したあとで、あの女をつれ込み宿へ誘ったとみてよいでしょう。もう、このあたりから、わたしにすれば、名本は、重要保護観察者としての、遵守事項を踏みはずしていると思えるのです。ここのところを、石出さんは、どういうわけか、不問に附して、あの一枚の絵はがきの歌を遺書と判断して自殺と処断した。これは、福井側にすれば、まったく無茶だと思われます。きよ子さんに、自殺の意志はなかった……いや、これは、まあ憶測ですが、しかし羅東伯さんや、富山の身内の人らのはなしを総合してみて、たしかに自殺はおかしいと思われます。とすると、再調査の必要は出てくる。わたしは名本君が刑務所から、どのような荷物をもって、社会へ出てきたかしりませんが、荷物の行李の底には、五年間の彼女の手紙が入っていたはずですね。その手紙にすら、石出さんは、目を通していない。こんな不思議な捜査があっていいものでしょうかね」

松山は、さらに語をつぐ。「そこで、福井県警は、去年のあの事件から、再々、岐阜県警に対して、真柄きよ子の死について再調査を願い出ているわけですが、岐阜ではもう自殺として処理したから、その件は……というわけで、相手になってくれない。これが実情です。ところが、今度、久しぶりに石出さんに会ってみると、どうやら少し雲ゆきがかわってきている。それは、大垣で起きた、モーテル『夢路』にかかわる、ある娘さんの自殺が端緒です。モーテル『夢路』のマッチがハンドバッグに入れてあったことから、大垣署が不審を抱いて捜査をはじめた。当然、石出さんも、本部にいて、この報告をうけて、どうやら、この事件が、長良川の事件に似ていることに勘づかれたわけです。にわかに、長良川のことも、考え直さねば、という気持に変ってきた。これは、わたしども

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com